

青年期の友人関係における心理的距離に関する研究動向と発達の意義

藤井 恭子 (愛知教育大学学校教育講座)

(2003年11月28日受理)

The Research Trend about the Psychological Distance in the Friend Relation of Adolescence and Development-meaning

Kyoko FUJII (Department of School Education, Aichi University of Education)

要約 哲学, 社会学, 心理学における心理的距離に関する論究・研究結果を整理し, その動向を明らかにするとともに, それらの知見の有効性や問題点を検討した。また, 青年期において友人との適度な心理的距離を模索することはどのような発達の意義があるのかについて検討した。それにより, 哲学などで指摘されてきた心理距離のとり方における力動性が心理学の実証的研究においてすくわれてこなかった現状があることが明らかとなった。かつてのように人間関係における規範やルールが分かりづらい現代においては, 個の発達と相補して, 山アラシ・ジレンマのような葛藤を通して適度な心理的距離を作り上げることに意義があると考えられた。

Keywords : 心理的距離, 力動性, 実証的研究, 青年期, 発達の意義

はじめに

友人関係, 人間関係, 心理的距離といったテーマは, これまで青年心理学だけではなく, 社会心理学や臨床心理学でも多く取り上げられてきたテーマである。とくに自我の確立がまだ完成していない段階の青年にとって, 他者, とくに友人との関係は非常に重要であり, 対人関係の問題が自我の発達の問題と密接に関わっているという論が, 青年期研究において多く見られるようになってきている。山本¹⁾は, 人間が互いに侵し合うことなくその関係を生産的に維持できるかどうかは各々の「個」の確立に拠ることを指摘している。そして山本¹⁾はEriksonのいう親密さの危機について, 「同一性の未熟さや脆弱さが潜んでいる時には, 親密な対人関係をもととすること自体が, さらにひどい混乱と自我の病的退行を引き起こすものである」と説明している。Erikson²⁾自身, 同一性混乱によってあらわになる対人-対象関係の病理を, 対人的-心理的距離を保つ能力の失調とみなしている。

しかし, こういった一部の臨床的援助が必要な青年に関する文脈の中でのみ語られてきた距離感覚の失調という現象が, 今日では一般的な現象として顕在化するようになってきた。かつての社会に存在していた他者との心理的距離を決定する規律やルールといったものは, さまざまな価値観の変遷とともに, 非常に曖昧になっている。相手とどこまで親しみ, どこまで隔たりを置くかについての修練が, より一層重要になってきたともいえるであろう。その背景には, ここ数十年の“個性尊重”教育と, 従来の日本的な“甘え”文化とのギャップがあり, その結果, 人と人との距離のとり方が急激に変化せざるを得なかったのであろう。そ

して, 友人との心理的距離をめぐる混乱やジレンマは, いまや青年期に共通の課題となりつつある。現代は, 人との距離のとり方についての新たな視点が求められる時代であるといえよう。

こうした問題を背景として, 本稿では心理的距離に関する研究動向を整理し, 青年期の友人関係における発達の意義を考察する。

1. 心理的距離に関する研究

哲学における心理的距離の論究—自己と他者との関係—

自己と他者との関係については, 数多くの思索がなされてきた。なかでもブーバー, M.³⁾の「我-汝」と「我-それ」という2つの根源語による関係は有名である。Buberは, この2対の関係において, 決定的な違いを指摘した。

「我-それ」の関係における他者は, 対象化され, それ化され, 「もの」としてのみ見, そして利用される交換可能な存在である, そのような自我中心的なあり方においては, 他者は対象に過ぎず, 人間は非人格化されてしまう。それは他者疎外, 自己疎外, ひいては人間疎外へとつながる。一方, 「我-汝」の関係における他者とは, 非対称的な主体(実存)であり, 全体性-唯一性としての存在である。また, そこでの「我」は, 自我中心のおのがはからいのとらわれから脱却した「すっかり打ち開かれた全体の人間」である, ここでの主体性対主体性としての「出会い」によって, 存在の相互関係が生ずる。

そして「我-汝」の向かい合いは, 他者との間に「原理隔」という隔たりをおくことによつてのみ可能

となる。Buberにおいて、間、隔たりということは、単に我と他者との空間的距離として静的客観的に捉えられているのではなく、むしろそれを可能にする人間の原運動として動的主体的に捉えられている。出会いによってそのつど新たに我と汝との間として構成される実存的空間、実存的隔たりである。この実存的間としての空間に着目すれば、我と我ならざる汝の根源的他者性、したがって、我と汝との差異性が成立する。すなわち、そこに一体性は成立しない。

このような隔たりをおくという構造契機を前提として、「関係への参入」という構造契機が加わらねば、向かい合うことはできない。「関係への参入」とは、腹藏なく、おのがはからいを脱却した開けた自己を投げ入れることで、人格的に触れ合うことを意味する。Buberは「原隔たり」の事実はいかにして人間は可能であるかという問いに対する本質的な答えをわれわれに与えてくれる」として、人間存在を「隔たりと関係との協働から理解されるべきである」と主張する。

和辻⁶¹は、近代的な自我を超えるものとして、関係主義的な自我観を打ちだした。和辻は「人間じんかん」という言葉を取り上げて、解釈を加えた。この「人間」という言葉は、中国では世間を意味しているに過ぎなかったが、これが日本に移入されて以来「ひと」という意味に転用された。このことの内に、「人間が社会であるとともにまた個人であるということの直接的理解」を発見し評価する。そこにおいて他者は、同じ共同性を担うものとして捕らえられる。

和辻においても、「間（仲）」は、主体的行為的連関としての生ける動的な間である。自他は絶対に他者であり、相互に絶対に他者であるところの自他がそれにもかかわらず共同的存在においてひとつになる。個人は多数であり、その多数の個人が個性を捨てて一となるところに、共同存在としての全体が成り立つ。しかし、いかなる全体においても個性が消滅し尽くすというようなことはないとする。

このように、和辻の共同体論においては、基本的に個と全体との関係が常に主題とされる。しかし、個と個、すなわち自己と他者との関係は、他者は自己との同質性において捉えられており、他者の異質性に対する注目が十分ではないという指摘も多い。

それに対し西田⁶²は、「汝」の他者としての絶対性を強調した。「私に対して汝と考えられるものは絶対の他と考えられるものでなければならない。物はなお我においてあると考えることもできるが、汝は絶対に私から独立するもの、私の外にあるものでなければならない」と主張する。しかし、この「絶対の他」は、私自身の自己と別のものでなく、「自己が自己において自己を見ると考えられるとき、自己が自己において絶対の他を見ると考えられるとともに、その絶対の他者すなわち自己であるということの意味していな

ればならない」としている。すなわち、「私と汝」との関係について、「各自が絶対に自己自身に固有なる内界をもつ」と考えた。「汝」は「絶対の他（あいだ）」によって隔てられていることによって「汝」でありうる。そのことによって、「私」もまた自己としての私自身となる。そして、「私はと同感することによって汝を知るよりも、むしろ汝と相争うことによって一層よく汝を知るといえることができる」とも言う。これは、自己—他者の同質性を重視した和辻の主張とは、異なる主張である。

谷口⁶³もまた、「人間」についての考察をしている。日本語の「人間」という言葉の示すとおり、人間とは人之間であり、人間は間に住むものである。西欧では、一般に隔たりをおくところに間を捉え、人間関係においても、一定の距離を保つ、甘えのない知的な人間関係である。一方、日本では隔たりをなくすところに間を捉え、人間関係においても、多少甘えのある、互に一体感をもつ情的な関係が濃厚であるとする。

そのうえで、出会いにおいて間は、Buberの主張するように単に二性が成立するばかりではなく、同時に一性が成立するところでもあるとする。しかも、二性は一性と結びつき、二即一、一即二としてある。つまり、われと汝は異なる根源的他者性を有するものであるにしても、それを認めたくて、なおかつその再生を超えて、我と汝とが永遠の精神において一つに結びつく。我と汝は異なりつつ、しかも隔たりを超越して結ばれ、一つに融合する、この一如相を谷口は「大我」と呼ぶ。しかし、隔たりを超越するということが、隔たりがないということではない。それは隔たりがありつつ、隔たりがないことであり、谷口は甘えを否定する。甘えのない豊かな心情を持つてする一体性を自覚した我と汝との関係こそ、「われわれ」であると捉えた。ただし同時に、「徐々にではあるが、西欧流に互いの中に距離を置こうとする傾向が見受けられる」という指摘もしている。

木村⁶⁴は、「人と人との間」について、「自己と自己ならざるもの、私と汝、個人と個人がそこから同時に成立する、この何かのある場所」と定義する。そして、日本人の対人関係と西洋での対人関係を区別した。西洋での対人関係を維持するコツは、「相手がいついかなる行動に出るかを予想し、自分がこう振舞えば相手はこうしてくるという規則を身につけて、自分自身が規則的・合理的に行動するというに尽きる」とする。そして、自分と相手との間に遠すぎも近すぎもしない至適距離を保って、その隔たりの上で相手の動きを観察して自分の動きを決めていくことが重視される。それに対し、日本人の対人関係は、「自分を相手との関係の中へ投げ入れ、そこで相手の動きを肌で感じ取って、それに対して臨機応変の出方をしなくてはならない。自分を相手に預ける、相手次第で自分の出

方を変えるというのをもっとも理にかなった行動様式となる。その結果、日本人の人と人との間はある意味では無限に密着したものとなる。つまり、日本においては、自分が現在の自分であるということは、決して自分自身の「内部」において決定されることではなく、常に自分自身の「外部」において、つまり人と人、自分と相手の「間」において決定される。「自分を自分たらしめている自己の根源は、自己の内部にはなくて自己の外部にある」のである。

木村⁸⁾はまた、汝との関係はBuberのこのような美しい調和の関係にはとどまらないとする。「汝」は同時にいくらか「それ」であり、すべての「それ」は同時にいくらか「汝」でもある。Buberが強調している「あいだ(間)」の領域にこそ、「汝」にいくらか「それ」性を与え、「それ」にいくらか「汝」性を与えることによって、人間と世界との出会いを可能にし、人間が「関係の中に立つ」ことを可能にすると主張する。

以上のような指摘は哲学においてなされてきたものであるが、これらの指摘をもとにして、社会学の浜口⁹⁾は、「個人主義」とは対照的な日本独自の人間存在のあり方を「人間主義」として述べている。つまり日本人は、自己を完全に他から独立した主体である「個人」として意識するよりも、和辻のいう「人間」としての“ひと”、あるいは木村のいう「人と人とのあいだ」に位置づけられた“自分”を設定する傾向が強い。こうした人間観のもとでは、自分は「我」として「汝」に対するのではなく、「汝の汝」という相対化された存在として相手に接するのである。ようするに「人間」とは、個体的自我の連結体でも延長体でもなく、「対人的な意味連関の中で、連関性そのものを自己自身だと意識するような、にんげんのあり方」だとする。

このように哲学を中心とした論究において、関係の中で人間存在を規定する思索がなされてきた。とくに日本人の文化的価値観の中で、「間」によって人間は存在するという文脈は根強い。

心理学における心理的距離に関する実証的研究

対人場面における自己と他者との距離には、物理的レベルでの対人間距離と、心理的レベルでの心理的距離との2つがある。前者はパーソナル・スペースという概念として社会心理学を中心に研究がなされてきている^{10) 11)}。一方、心理的距離という概念についての研究がなされるようになってきたのは、1980年代からである。

DICTIONARY OF PSYCHOLOGY (J.P.Chaplin, 1975)には、「距離」について、「個人が他者から離れていると感じている程度、あるいは個人が親密で意味のある関係を作っていくのに困難を経験する程度。」と定義されている。また、DICTIONARY OF PSYCHOLOGY (A.S.Reber, 1985)には「心理的距離」として、「社会心理学においては、個人間で相互作用

が起こるときに経験される困難の量について言及することによって、普通は表現されるような、個人間が離れている程度。」と定義されている。とはいえ、これらの定義がその後の実証的研究にそのまま用いられることはなく、研究の数は多いとはいえないのが現状である。しかし、それらを整理したところ、①面識度水準別に他者を分類し、心理的距離の4つの側面から対人経験を分析した社会心理学的研究、②母子関係、教師-生徒関係における問題としてとりあげた臨床心理学的研究の3つに分類された。以下、順に述べる。

①社会心理学的研究

山根¹²⁾は自己と相手との間の心理的距離(の近さ) = 「親密感」と定義した。対人関係という相互に独立した主体がかかわりあう場においては、自己の相手(対象)に対する心理的距離だけでなく、それとは別に相手の自己に対する心理的距離というものも体験されるとする。そして、質問紙法による調査を行っている。心理的距離は、「心理的な‘近さ’」を測るものとして真他人・知他人・周辺知人・真知人の4つの面識度水準に相手を分ける際に、量的測定に用いられた。また、心理的距離の体験についての4側面(能動表出一自己側の行動に追って示される表出的距離、能動表象一本心としての表象的距離、受動表出一認知された相手側の表出的距離、受動表象一推定された相手側の表象的距離)を指摘し、そのズレ・ミゾについて、4つの面識度水準(4項目)をもとに測定した。その結果、心理的距離が遠いとみなされる真他人ほど、ズレやミゾの多いことなどを明らかにしている。心理的距離のもつ複雑な体験構造を整理した研究である。

②臨床心理学的研究

秋山ら¹³⁾は、「母子間の心理的距離テスト」を開発し、母親の子どもに対する距離のとり方にはどのような型があるか、あるいはまた、心理的距離と母親の子どもに対する感情・態度や母親の性格との関連を分析した。

さらに橋爪ら¹⁴⁾は、教育相談や育児相談の場面において、問題行動の背景にある家族力動を重視し、その理解のために秋山ら¹³⁾の「母子間の心理的距離テスト」を臨床場面に応用している。

一方、山口ら¹⁵⁾は、生徒が認知している生徒-教師間の心理的距離の程度についての分析を行っている。ここでは、心理的距離について親密度、気軽さ、気楽などの語で説明され、「親密さ(何でも隠し立てしないで気軽に話せる、不安・緊張・脅威を感じないなど)」と「疎遠」を対極とすることを意味している。また、その際の測定方法は、父親を1と規定したときに各教師が10段階評定でどこに位置するかについての評定を求めるものであった。同様に、母親を1と規定しても測定し、比較を行っている。この尺度を使って

は、その後も性格類型などの観点から引き続き研究が行われている^{16) 17)}。

③発達心理学的研究

金子¹⁸⁾は、この心理的距離を親密性や依存性と類似概念と重なりあったものとしながらも、自己とさまざまな対象との関係を考えるとき、たとえば、自分が親しみを感じている人についてと嫌悪感を持っている人について、心理的なつながりのレベルを比較しようとするとき、よりの確な概念としてこれを用いた。この中で金子は心理的距離を、その心理的な‘近さ’に重点をおき、「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解しあった関係をもっていると感じているかの度合い。」と定義している。ただしこの定義は、対極に‘遠さ’の認知をおいていない。‘近さ’の一極にどれだけ近いかを想定したものである。そして、10項目の尺度を作成し、青年期女子の親子・友人関係との関係をみている。

また天貝¹⁹⁾は、心理的距離を「親密さの程度」と「他者との融合の程度（依存性）」の2側面から捉えられる現象であるとし、自分を中心として、9.5cmの線分に相手（友人・教師・家族）の位置を投影させる方法で測定している。そうして得られた心理的距離の程度と信頼感との関連を明らかにしている。投影法によって測定された心理的距離と個人内要因との関連をみた研究である。

一方、上野ら²⁰⁾は、東京都生活文化局²¹⁾の結果から、青年期の友人関係において、心理的距離のとり方が重要な側面になっていることを指摘し、調査を行っている。この研究では、「外面的な同調行動（4項目）」と「内面的な心理的距離（3項目）」の2側面を同時に検討することで、両者の意義をより明確にし、高校生の友人関係を類型化しようとした。本文中で上野ら自身によっても指摘されているように、心理的距離を測定する項目が3項目と少なく、更なる仮説検証的な研究の必要性があることは否めない。しかしながらこの研究は、心理的距離の大きさを否定的にとらえるだけではなく、その肯定的側面の可能性を踏まえて行った数少ない研究である。すなわち、友人関係に依存し、密着したつきあい方をすることが必ずしも成熟した人間関係なのではなく、自律性が高いことが友人との心理的距離を大きくしている可能性を考慮すれば、友人と心理的距離をおくことが、むしろ発達の望ましい面を有していると指摘するなど、のちの現代青年の友人関係に対する知見としては非常に有用なものであると考えられる。

心理的距離に関する実証的研究の問題点

前項でとりあげた研究において、大きくは3つの問題点が上げられる。

1点目は、測定内容が一貫していないことである。

これは、言い換えれば定義の不明確さである。あらかじめいくつかの側面に分類してその差に着目するもののほか、親密性や依存性などの言葉と同義であったり、説明されたりしている。また、対極の概念も不明確なままである。各研究者によって心理的距離についての定義・概念が多様であり、なかには明確な定義のなされないまま行われているものもある。これによって、研究者の間で心理的距離という概念についてのコンセンサスがまだ得られていないと考えられる。

2点目は、測定方法の問題である。測定内容・定義の不明瞭さ・不徹底さの反映でもあるが、測定方法もまた研究者によって多様である。自己と他者の認知のベクトルのズレをみるもの、自分の身近な他者を基準とするもの、自分自身を基準とするもの、相手との心理的近さを測定するものとして項目化したものなど、さまざまに行われている。だが、なかには尺度の信頼性や妥当性の不明瞭なものや、測定基準が各調査対象者に依拠しているため、測定内容が一貫しないものがあった。

3点目は、他領域での知見が生かされていないことである。第3章第1節に挙げたような哲学の領域で論究されてきたことや、第2章第2節に挙げたような社会学を中心に現実の問題として語られる現象が生かされていない。心理的距離についての問題は、心理学の実証的な研究のなかでこそテーマとして取り上げられることは少なく、また遅かったが、哲学・社会学だけでなく文学のなかでも古くから大きな主題であった²²⁾。人間存在への鋭い洞察のなかで、人が他者と近づいたり離れたりを繰り返す姿が描かれている。こういった他領域において、心理的距離は決して静的なものとして捉えられることはなく、生き生きとした躍動感を持つ力動的なものとして語られてきた。こうした他領域での知見、現実場面での現象を出発点とする実証的な研究が求められていると考えられる。

以上をまとめてみると、「心理的距離」と「心理的距離のとり方」とが明確に分離されておらず、両者が混じり合い混沌とした状況にあると考えられる。「心理的距離」とは、近いか遠いか、親密か疎遠かというような、今現在自分と相手との距離を固定的・一面的にどう認知しているかという問題である。つまりある一時点での「近いか遠いか」という認知であり、心理的距離を静的・一時的側面で捉えるものである。それに対して、「心理的距離のとり方」とは、近づくか離れるか、という欲求や意思や方向性などをもつ、力動的な側面である。つまり、「近づくか離れるか」という力動的・継時的側面といえよう。第2節で挙げた研究では、固定的・一面的な定義づけや測定をしたものがほとんどであるが、なかには力動的な側面と思われる部分が加えられ、一括して取り扱われている。

II. 青年期の友人関係に関する研究

現代青年の友人関係に対する否定的見解

多くの研究知見があるように、青年にとって友人がもつ機能は「心の友」とも呼ばれ²³⁾、人格的影響を及ぼしあうものであるとされてきた。しかし近年、現代青年の友人関係においても、社会・学校・文化といった文脈を強調する研究が数多くなされるようになってきている。それは、これまで指摘されてきた様相とは異なるものである。

栗原²⁴⁾は、現代青年の友人関係にみられる様相として、自他を傷つけることやアイデンティティの問題を回避すること、友人を自分の内面に立ち入らせないこと、群れていることでの安心感に支えられていることなどを挙げ、これらは「ナルシズム的で自己中心的な閉じられたやさしさ」であるとしている。

また千石²⁵⁾は、現代青年の特徴として、ひとりになることを極端に恐れ、群れ的な関係をとること、硬い話題や問題を避け、とりあえず楽しければそれでよいと考えていること、互いに傷つけることを極端に怖れ相手から一步引いたところでしか関わろうとしないことなどを挙げている。また千石²⁶⁾によると、現代青年は相手と距離を置いた範囲でしか自分を打ち明けない傾向がある。

町沢²⁷⁾は、現代青年は「表面的人間関係がうまい青年と、他者との距離のとり方がわからずに内にこもってしまう青年とに二極分化しつつある」と述べている。

大平²⁸⁾は、現代の青年がホットとクールの間であるウォームの関係を保とうとする傾向を指摘している。その関係においては、互いに傷つかなないように深入りしないことを鉄則とし、相手の気持ちに踏み込んでいかぬように気をつけながら、滑らかで暖かい関係を保っていかうとする。現代の人間関係では対人関係上の葛藤や自己内のジレンマをできるだけ避け、減らす工夫として、お互いを傷つけない「やさしさ」で人づきあいがなされているとする。

ここまでは評論によって指摘されてきたものであるが、心理学における実証的研究においても、東京都生活文化局²⁹⁾ですでに、青年期の友達とのつきあい方について数量化Ⅲ類の分析を行った結果、「相手との心理的距離」と「交際への気遣い」の2軸が見出されてくる。この結果を踏まえ、東京都生活文化局²¹⁾では、中学生や高校生の友達づきあいが学年によってどのように変化するかを分析している。その結果、学年があがるにつれて「心を打ち明けあう」行動が急激に増加し、「相手に甘えすぎない」という行動も徐々に増えている。一方、「一人の友よりグループ全体で仲良くする」行動は学年があがるにつれて減少しているということも分かった。

この結果を受けて菅原³⁰⁾は、これらの項目を含む友達づきあいの仕方に関する項目への回答を再解析（数

量化Ⅲ類）し、それらあ「一人の友人とつきあうか、多くの友人を持つか」という軸と、「友人に配慮するか、気をつかわないか」という軸に分離されることを明らかにしている。そして、小学生では数人のグループで気軽に友達づきあいをしているが、中学生になると一人の友達との深いつきあいを求めるようになる。中学生から高校生にかけての時期には、学年が進むにつれて、親友に心を打ち明け、親密な心理的交流を行うようになる。同時に、友人に対する配慮の増加は、女子では中学2年生からすでに生じているが、男子ではやや遅れて高校1年からみられるようになる、としている。

また松井³¹⁾は、現代青年の友人関係の希薄化、すなわち「友人との全人格的な融合を避けて、距離を保ち、一面的で部分的な関係にとどめようとする、疎隔的部分的な志向性」を指摘している。

その一方で、上野ら²⁰⁾は、東京都生活文化局²¹⁾での結果を元に青年期の友人関係において心理的距離のとり方が重要な側面になっていることを指摘し、調査を行っている。この研究では、「外面的な同調行動（4項目）」と「内面的な心理的距離（3項目）」の2側面を同時に検討することで、両者の意義をより明確にし、高校生の友人関係を類型化しようとした。それによって、「表面的交友（心理的距離大・同調高）」、「個別的交友（心理的距離大・同調低）」、「密着的交友（心理的距離小・同調高）」、「独立的交友（心理的距離小・同調低）」の4類型に分類し、それぞれの特徴を検討した。その結果、心理的距離が大きく、かつ相手に同調する「表面的交友」群の男子は、劣等感や問題行動への念慮など心理的葛藤が大きいことが明らかにされた。さらに、心理的距離をとる一方で同調的な交友関係をもつ「表面群」には、家庭思考や精神的不安定さなどの特徴が示された。この研究は、心理的距離の大きさを否定的にとらえるだけではなく、その肯定的側面の可能性を踏まえて行った数少ない研究である。すなわち、友人関係に依存し、密着したつきあい方をすることが、必ずしも成熟した人間関係なのではなく、自律性が高いことが、友人との心理的距離を大きくしている可能性を考慮すれば、友人と心理的距離をおくことが、むしろ発達的に望ましい面を有していると指摘している。

また岡田・永井³²⁾は、大学生において、自分自身に対する内省に乏しい青年と、友人関係の深まりを回避し友人関係を楽しく維持しようとする青年とが別の群に分類されるとしている。岡田³³⁾は大学生における自分自身への内省傾向と友人関係の特徴から、①内省に乏しく友人関係を回避する傾向の高い青年、②表面的には明るく友人関係をとりながらも他者からの評価や視線に気を遣う青年、③自己の内面に関心が高く自分の生き方などを深刻に考える、従来の青年期について

の記述とほぼ合致する青年の3群を見出した。そして岡田³⁴⁾では、大学生の友人関係には、集団で表面的な面白さを志向する「群れ志向群」、友人に気をつかいながら関わる「気遣い関係群」、深い関わりを避ける「関係回避群」があることを見出している。

このように、かつての青年期の友人関係で指摘されてきた特徴は変容し、現代青年の顕著な特徴として新たな知見が提示されてきている。だが一部の見解を除き、それらの多くは「表面的かかわり」「希薄化」などといった否定的見解が大半である。前述の先行研究では、現代青年が相手との心理的距離を大きくもつことによって、自分も相手も傷つかないようにする傾向があることが指摘されている。しかし、実際の青年を内面からみつめるという点、心理的距離のとり方の発達の意義における検討は、いまだ不十分といわざるを得ない。

実際の青年は、相手とどこまで親しみ、どれだけ隔たりをおいたらよいかについて、それを決めるよりどころを求めて絶えずダイナミックに揺れ動いていることが多い。現代青年は、相手と親密な関係をもちたいと願う一方で、傷つけあうことを恐れ、「適度な」距離を模索して揺れ動いているのではないかと思われる。青年自身は友人との心理的距離のとり方について、どのように感じているのであろうか。また、そのような否定的な見解で評される青年自身は、自分たちの友人関係についてどのように考えているのであろうか。こういった問いかけに対して、青年自身の認知と実際の姿をすくいあげる研究を行っていく必要があろう。

III. 発達のみにみた心理的距離への内省の深まり

適度な心理的距離の模索にともなうジレンマ

前章に述べたように、心理的距離のとり方は、力動的な側面をもつ。それは、具体的にはどのような現象なのであろうか。

実際の青年期の友人関係においては、心理的距離のとり方には、相手と近づこうとするか、離れようとするかという方向性のみならず、相反する欲求が同時に生じることによって、ジレンマを引き起こしやすい。たとえば、「相手に近づいてもっと親しくなりたい反面、相手の重荷になって嫌われるのが怖い」とか、「相手に飲み込まれているような気がして少し離れたいが、関係すべてが崩れてしまう気がして離れられない」といったジレンマである。これらの心理的距離のとり方をめぐるジレンマは、「大きい小さいか」といったような静的なものではない。相手とどこまで親しみ、どれだけ隔たりをおいたらよいかについて、それを決めるよりどころを求めて絶えず力動的に揺れ動いていることが多い。つまり心理的距離を大きく持っても、その状態に安住しているとはいえないことが推測される。現代の青年は相手との親密な関係をも

ちたいと願う一方で、傷つけあうことを恐れ、「適度な」心理的距離を模索して揺れ動いているといえよう。つまり、「相手とどのくらい距離をとればいいのか?」という問いを模索すると考えられるのである。

かねてより心理的距離をめぐるジレンマとして論究されて来たのは、Schopenhauer³⁵⁾の寓話から生まれた山アラシ・ジレンマという現象である。その寓話とは、「山アラシの一群が、冷たい冬のある日、お互いの体温で凍えることを防ぐために、ぴったりくっつきあった。だが、まもなくお互いに棘の痛いのが感じられて、また分かれた。温まる必要からまた寄り添うと、第二の禍が繰り返されるのだった。こうして彼らは二つの難儀のあいだに、あちらへ投げられこちらへ投げられしているうちに、遂に程々の間隔を置くことを工夫したのであって、これで一番うまくやっていたようになったのである」というものである。つまり、山アラシの比喩を用いて、他者との適度な心理的距離をめぐるジレンマを表したのである。この寓話をもとにして、Freud³⁶⁾は距離がなくなるほどにつる愛と憎しみといった、相反する感情の葛藤としてアンビバレンスの説明を試みた。その後、アメリカの精神分析医Bellak³⁷⁾が、人間関係、とくに二者関係における適切な距離のとり方に関する「近づきたいー離れたい」という葛藤を説明する言葉として発展させ、「山アラシ・ジレンマ (porcupine dilemma)」と命名した。彼は山アラシ・ジレンマを、居心地のよい親密さを求めるために生じるジレンマであるとしている。

では現代の日本において心理的距離のとり方をめぐるジレンマはどのように捉えることが出来るのであろうか。谷口⁹⁾は、西欧での人間関係は「一定の距離を保つ、甘えのない知的な人間関係である」とし、一方日本では、隔たりをなくし「多少甘えのある、互いに一体感をもつ情的な関係が濃厚である」としている。しかし、日本においても「徐々にではあるが、西欧流に互いの間に距離を置こうとする傾向が見受けられる」と指摘している。いわば現代は、かつての相手との隔たりをなくした甘えのある日本独自の人間関係から、相手との適度な心理的距離を保って成り立つ新たな人間関係へと移行している時代であると考えられるのである。しかしこの人間関係のあり方は、いまだ成熟しきっているとは考えづらい⁹⁾。そして小此木³⁸⁾は先の山アラシ・ジレンマを現代社会に投射し、「個人と個人の心理的な距離を規制するルール(内的な規範、道徳、礼儀)が失われている現代社会において、対人的な距離感覚の失調状態にある現代人にとっては、人

1) ここでの「ー」は、逆接を表す。つまり、「近づきたいー離れたい」という場合、「近づきたい」という欲求と同時に、「離れたい」という逆の欲求が存在し、葛藤していることを表す。つまり、「近づきたいが、離れたい」との意味である。

と人との距離のとり方をめぐる特有のジレンマ」であるとした。そして小此木³⁸⁾は、現代人の人間関係が希薄になり、この山アラシ・ジレンマが現代人の「個」の生き方を問うものとして生活の諸側面で見られることを指摘している。現代社会で新たな他者との関係のあり方を構築するためには、おのずと新たな「個」のあり方をも問われることになる。

以上のような指摘から、適度な心理的距離の模索に伴うジレンマは、同一性（自我）の未熟さや脆弱さが潜んでいるため、親密な対人関係を求めるなかでたびたび引き起こされると考えられる。では、自我が芽生え、確立までの過渡期にある青年期において、このような心理的距離に伴うジレンマは、どのように関連しているのだろうか。

藤井^{39) 40)}は、山アラシ・ジレンマという視点から力動的に心理的距離を捉えることをこころみた。「近づくか、離れるか」といった静的な距離のとり方と相反する「近づきすぎたくない」「離れすぎたくない」という欲求を通して、現代青年にとっての友人との適度な心理的距離とはどのようなものかを明らかにしたものである。ここでは主な結果として3点上げられる。まず第1点は、ジレンマの分類である。これまで心理的距離のとり方をめぐるジレンマとして論究されてきた山アラシ・ジレンマは、同性の重要な友人に対して「近づきたいー離れたい」というものであった。これは、実際の友人とのかかわりの中で生じるジレンマであり、その中で傷ついたり寂しい思いをすでにしていると思われる。しかし、そこで析出されたのは、「近づくこと」「離れること」それぞれの中で、ある一定の内的基準にもとづいて調整される「近づきたいー近づきすぎたくない」「離れたいー離れすぎたくない」というジレンマであった。これらを図示するとFigure1のようなになる。この研究の結果得られたジレンマは、あくまでも主観的な内的基準によって生じるものであり、「それ（主観的基準）以上」近づいたり離れたりすることで、互いを傷つけあうことへの予期的なジレンマであると考えられる。

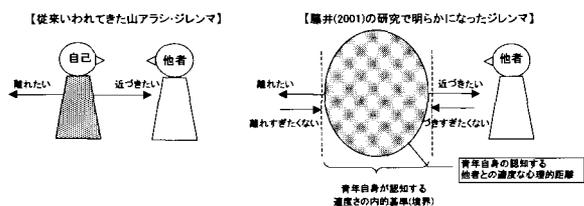


Figure1 心理的距離のとり方をめぐるジレンマの概念的比較

第2点は、ジレンマの心理的要因である。近づく場合にも離れる場合にも共通してみられたのは、自分が傷つくことや寂しい思いをすることを回避しようとして生じる対自的要因と、相手を傷ついたり寂しい思いをさせることを回避しようとして生じる対他的要因であった。そして、青年は相手を守るためといいながら、

実は自分自身を守ろうとしてジレンマが生じているのである (Figure2)。相手を理由にしているけれども、実は自分の理由でジレンマが生じているのであり、ここに青年の友人関係における自己中心的な傾向がみとれる。

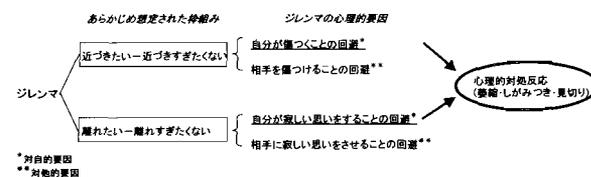


Figure2 ジレンマの心理的要因と心理的対処反応への影響

また第3点は、ジレンマと心理的対処反応、および心理的距離の関係である。自分を守りたいというジレンマは、心理的対処反応に結びつきやすい。対人関係上の混乱状態にもなる心理的対処反応は、相手との関係で萎縮したり、相手にしがみついたり、相手を見切ったりするというものである。その心理的対処反応は、自分を守ろうとするジレンマほど生じやすい。ジレンマ自体は、相手のことも自分のことも守ろうとして生じるのであるが、そのうちの自分を守ろうとする心理が、心理的対処反応に結びつきやすい。ひいては、それがさらに相手との心理的距離を遠いと感じさせてしまうのである。すなわち、自分を守ろうとしてジレンマが生じ、それによって心理的対処反応を引き起こし、さらに相手との心理的距離を遠いと感じるようになってしまう連鎖が示された。

萎縮やしらがみつみや見切りといった心理的対処反応は、青年期の友人関係において大多数の青年が共通して行うものではないが、こういう混乱状態に陥っている青年は、自分を守ろうとする心理が強く働いていると考えられる。この検討の結果得られた心理的対処反応は、自分を守ろうとしてジレンマが生じた結果であり、さらなる相手との心理的距離の遠さの感覚へと連鎖していくことが明らかとなった。しかし、Shopenhauer自身が指摘しているように、山アラシ・ジレンマは否定的な意味合いばかりではなく、適度な心理的距離を見出すための試行錯誤の意味合いも大きい。友人との適度な心理的距離を模索してジレンマの中を生きることが自然な青年の姿であるといえよう。

個と関係の相互発達

そして近年、人間存在の基本次元として、2つの方向性が数多く指摘されてきた。

文化比較理論では、Benedict⁴¹⁾の「罪の文化」と「恥の文化」や、Markus & Kitayama⁴²⁾の「独立的自己」と「相互依存的自己」、浜口⁹⁾の「個人主義」と「間人主義」などに代表される、「西欧的」対「日本的」といった二分法である。

社会心理学理論では、Fenigstein et al.⁴³⁾の「私的自己意識」と「公的自己意識」などに代表される「対自的」対「対他的」という二分法である。

発達・人格理論ではまず、相反する道徳性発達理論が提唱されてきた例がある。道徳性は分離—個体化の経路をたどる「正義の道徳」であるとするKohlberg⁴⁴⁾と、対人的相互依存関係の中で獲得される「配慮と責任の道徳」であるとするGilligan⁴⁵⁾である。そのほか、落合⁴⁶⁾は孤独感という切り口から「個別性の自覚」と「他者との共感性」を、山本⁴⁷⁾は人格の二面性という切り口から「分離した自己 (Separated-self)」と「関係的自己 (Connected-self)」を、伊藤⁴⁸⁾は「個人志向性」と「社会志向性」を、それぞれ2つの方向性として見出している。これらは「分離性」対「関係性」という二分法を提示したものである。人間発達を捉える枠組みとして、このような二分法が有効であるとする指摘もなされてきている⁴⁹⁾。

その一方で、この二分法に対する批判も出てきている。中でも、アイデンティティ形成を捉える際の関係性の視点を重視する指摘がある⁵⁰⁾。その背景の一つにはアイデンティティ形成における性差の問題がある。

Erikson²⁾は、自らの理論が女性の発達を十分に考慮していないことへの補遺として、「内的空間説」を提唱した。そこでは、女性のアイデンティティ形成にとって、対人関係領域が重要な位置を占めることが示された。その後、男性のアイデンティティにおいては「個人内領域 (Intrapersonal domain)」、女性のアイデンティティにおいては「対人関係領域 (Interpersonal domain)」という、男性と女性のアイデンティティを二分法的に捉える図式が出来上がった。

一方でこの二分法を強調するのではなく、対人関係領域を男女両方のアイデンティティにかかわるものとして捉える必要性を実証した研究も出てきた⁵¹⁾。

さらに、アイデンティティそのものが本来、関係の中で発達するという視点が現れた^{52) 53)}。なかでもArcher⁵²⁾は、アイデンティティそのものが関係の中で発達すると考えた場合、同じく性差として論じられてきたErikson理論における第V段階 (アイデンティティ) と第VI段階 (親密性) の順序の問題を見直す必要があると指摘している。

この点について、Franz & White⁵⁴⁾は発達の「複線モデル (two-path model)」という非常に意義深い提案をしている。彼女らは、Eriksonの個体発達文化の図式を展開・応用して、人間の生涯発達を個体化の発達と愛着の発達という2つの経路で理解しようと試みている。この2つの経路は、個の発達と関係の発達を同等の価値を持つものと捉え、両者が相互に影響を及ぼしつつアイデンティティが発達していくことを示唆したものである。

このような、個の発達と関係の発達という2つの人格的特徴を生涯発達の視野のもとで捉えようとする実証的な研究は、最近数多く行われるようになってきている^{47) 48) 55) 56)}。これらの見解を総括して岡本⁵⁷⁾は、個

の発達と関係の発達について、「生涯を通じて進み、両者がともに達成された、つまり両者が統合された状態、が成熟した人間の状態である」としている。

また、Stephen, Fraser & Marcia⁵⁸⁾は、自分以外のもの (他者) に対する開放性が高いほど、アイデンティティが発達するという調査結果を踏まえて、世界に対する自己の関係のあり方の発展こそが、アイデンティティの発達であると提言した。

これらを受けて杉村⁵⁹⁾は、青年の世界との関係の仕方こそがアイデンティティである、という新しいパラダイムを提唱している。杉村は、「アイデンティティは、青年の内部のみにあるのではなく、世界の側のみにあるのでもなく、両者の関係においてはじめて存在する」として、分離と結合の両側面の相互作用を重視している。また、梶田⁵⁹⁾は、「人間はそれぞれ固有の世界を持つ個的存在でありながら、同時に他者とのかわりなしには生きることのできない集団的存在である」と述べ、相容れがたい2側面が人間の本质であることを指摘している。

以上のように、人間の発達プロセスを捉える観点として、「個」と「関係」という2つの方向性が平行して有効であることが多くの研究によって支持されてきた。しかもそれらは相互に促進しあうものであるという見解が多くの研究者によって提示されてきている。したがって、「個」あるいは「関係」は別々に扱うのではなく、個を通して関係を、関係を通して個をみていくことが、非常に重要な意味を持つと考えられる。

個の発達による心理的距離への内省の深まり

そして青年期の友人関係における発達の变化をみたとき、中学生から大学生へは質的に大きく転換し、大学生はより複雑な様相を呈するようになる⁶⁰⁾。岡田⁶¹⁾は大学生を対象として研究を行っているが、その中でもやはり大学生の特徴が述べられている。この中で、大学生期において理想自己像と現実自己像の相関が高くなり、とくに否定的側面でこの傾向が強まることを指摘している。そして、岡田³⁴⁾によれば、こういった自己概念が強く友人関係に影響している。

藤井⁴⁰⁾では、中学生・高校生へのインタビュー調査のなかで、中学生・高校生の段階ではまだ全体的に内省力が乏しく、自と他が未分化であり、「個」が未成熟であることが明らかとなった。自分と相手との心理的距離は、あくまでの青年個人の中で生じる認知レベルの問題である。心理的距離のとり方に対する認知によって生じるジレンマも、青年個人の認知構造の中で生じているという特徴からすれば、その青年自身の「個」のあり方と非常に密接なかわりを持っていると考えられる。実際、小此木³⁸⁾は、山アラシ・ジレンマへの適応について語る時、そのもっとも重要な鍵は「“個”の生き方」であるとしている。さらに、この内的発達については困難さをもつ特性からも指摘が

されている。対人恐怖的心性⁶²⁾や自己関係づけ⁶³⁾などの特性から、青年期後期になると、自己への関心が高まり、他者から自己をどう見られているかを気にするようになることが指摘されている。

おわりに

「心理的距離のとり方」は、ある程度「個」や「関係」についての内省力が高まることによって、相手との「心理的距離のとり方」という非常に抽象的な概念についても意識化されるようになっていくと思われる。自己の内面への意識の高まりや、相手との関係についての内省力の高まりなしに、相手とどれだけ近づき、どれだけ離れるかというような抽象的な思考はむずかしい。また、反対に自分というものが確固として築かれてしまったあとでは、友人との距離の問題は自己の存在価値を危うくする程度も少なくなる。したがって、「心理的距離のとり方」という非常に抽象的な概念について分析する場合、「個」の成熟という発達の指標を軸に据え、検討を行うことで、青年期の友人関係における心性をより端的に理解することができると考えられる。

引用文献

- 1) 山本 力 1984 アイデンティティ理論との対話 鏑幹八郎・山本 力・宮下一博(編) アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版 pp.9-38.
- 2) Erikson, E, H, 仁科弥生(訳) 1980 幼児期と社会 みすず書房 (Erikson, E, H. 1968 *Childhood and society (2nd ed.)*. New York: Norton.)
- 3) ブーバー, M. 野口啓祐(訳) 1958 孤独と愛: 我と汝の問題 (Buber, M. 1923 *Ich und Du*. Leipzig. Um ein Nachwort erw eiterte Neuausgabe, Heidelberg.)
- 4) 和辻哲郎 1937 倫理学 岩波書店
- 5) 西田幾多郎 1965 私と汝 西田幾太郎全集第Ⅳ巻 岩波書店
- 6) 谷口龍男 1980 「われとなんじ」の哲学: マルティン・ブーバー論 北樹出版
- 7) 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 8) 木村 敏 1988 あいだ 弘文堂
- 9) 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 10) 八重沢敏男・吉田富二雄 1981 他者接近に対する生理・認知反応: 生理指標・心理評定の多次元解析 心理学研究, 52, 166-172.
- 11) 吉田富二雄・児玉正博 1987 生理反応・心理評定によるパーソナル・スペースの検討: 慣れの過程の分析を通して 心理学研究, 58, 35-41.
- 12) 山根一郎 1987 心理的距離と面識度水準の効果に
もとづく対人経験の分析 心理学研究, 57, 329-334.
- 13) 秋山俊夫・板井修一・小串武・山下文雄 1985 母親の子供に対する心理的距離の測定の試み 小児の精神と神経, 25, 27-37.
- 14) 橋爪廣好・七浦久子・板井修一・秋山俊夫 1988 心理的距離テストの臨床応用に関する研究Ⅰ 日本心理学会第52回大会発表論文集, 57.
- 15) 山口正二・吉澤健二・原野広太郎 1989 生徒と教師の心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 22, 26-34.
- 16) 山口正二・小島弘史・原野広太郎 1991 性格類型に規定される心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 24, 11-17.
- 17) 山口正二 1992 高校生における好感的・嫌悪的イメージと心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 25, 31-36.
- 18) 金子俊子 1989 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 19) 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29.130-134.
- 20) 上野行良・上瀬由美子・福富 護・松井 豊 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 21) 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係に希薄化の問題との関連からみた分析— 同局発行
- 22) 夏目漱石 1932 行人 新潮文庫
- 23) 井上健治 1966 青年と人間関係—(1)友人関係— 澤田慶輔(編) 青年心理学 東京大学出版会
- 24) 栗原 彬 1989 やさしさの存在証明: 制度と若者のインターフェイス 新曜社
- 25) 千石 保 1985 現代若者論: ポストモラトリアムへの模索 弘文堂
- 26) 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊: 平成日本の若者たち サイマル出版会
- 27) 町沢静夫 1992 成熟できない若者たち 講談社
- 28) 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- 29) 東京都生活文化局 1979 大都市高校生の心理的特徴と生活環境 同局発行
- 30) 菅原健介 1986 現代青少年の対人関係 昭和59年度東京都「大都市青年に関する調査」より 青少年問題, 33, 2, 12-19.
- 31) 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊地章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp.283-296.
- 32) 岡田 努・永井 徹 1991 文章完成法による青年期心性についての考察 新潟大学教育学部紀要(人文・社会科学編), 33, 33-40.

- 33) 岡田 努 1993 自我同一性早期完了地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), 35, 57-68.
- 34) 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 35) ショーペンハウエル, A. 秋山英夫 (訳) 1973 比喩, たとえ話, 寓話 ショーペンハウアー全集14 白水社
(Schopenhauer, A. 1851 *Perergera und Paralipomena : kleine philosophische Schriften*. Zweiter Band)
- 36) フロイト, S. 井村恒郎 (訳) 1970 集団心理学と自我の分析 フロイト選集4 日本教文社 (Freud, S. 1921 *Massenpsychologie und Ich-Analyse*. Vienna. Gesammelte Schriften, 6.)
- 37) ベラック, L. 小此木啓吾 (訳) 1974 山アラシのジレンマ ダイアモンド社
(Bellak, L. 1970 *The Porcupine Dilemma : Reflections on the Human Condition*. New York. Citadial Press.)
- 38) 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中公叢書
- 39) 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 40) 藤井恭子 2002 青年期の友人関係における心理的距離をめぐるジレンマ 筑波大学博士論文 (未公開) .
- 41) ベネディクト, R. 長谷川松治 (訳) 1974 菊と刀：日本文化の型 社会思想社
(Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword : Patterns of Japanese culture*. Boston. Houghton & Mifflin.)
- 42) Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 43) Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 522-527.
- 44) Kohlberg, L. 1969 Stages and sequence : The cognitive developmental approach to socialization. In D.A.Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Chicago : Rand McNally.
- 45) ギリガン, C. 1986 岩男寿美子 (監訳) 生田久美子・並木美智子 (共訳) もう一つの声：男女道徳観の違いと女性のアイデンティティー 川島書店 (Gilligan, C. 1982 *In a different voice : Psychological theory and women's development*. Cambridge: Harvard University Press.)
- 46) 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31, 60-64.
- 47) 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 36, 238-248.
- 48) 伊藤美奈子 1992 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 49) 伊藤美奈子 1998 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, 41, 15-29.
- 50) 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 51) Thorbrcke, W., & Grotevant, H.D. 1982 Gender differences in adolescent interpersonal identity formation. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 479-492.
- 52) Archer, S.L. 1993 Identity in relational contexts : A methodological proposal. In J.Kroger (Ed.), *Discussions on ego Identity*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- 53) Marcia, J.E. 1993 The relational roots of Identity. In J.Kroger (Ed.), *Discussions on ego Identity*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- 54) Frantz, C.E., & White, K.M. 1985 Individuation and attachment in personality development : Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- 55) 木内亜紀 1997 女子大学生とその母親の相互独立・相互強調的自己観 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 56) 三枝奈穂 1998 成人女性における自我同一性感覚について：相互強調的・相互独立的自己観との関連から 教育心理学研究, 46, 229-239.
- 57) 岡本裕子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 58) Stephan, J., Fraser, E., & Marcia, J.E. 1992 Moratorium-achievement (Mama) cycles in lifespan Identity development : Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of Adolescence*, 15, 283-300.
- 59) 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 60) 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 61) 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.
- 62) 谷 冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, 45, 254-262.
- 63) 金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480.